

も、住馴し國人は平地の如く、勞せずして歩行せり、よりて彈を飛すといふ心にて國名とすといふ、辟説ならんかし、又當國に毛坊主とて、俗人で有ながら、村に死亡の者あれば、導師と成て弔ふなり、是を毛坊主と稱す、譯知らぬ者は、常の百姓よりは一階劣りて、縁組などせずといへるは、僻事也、此者共、何れの村にても筋目ある長百姓にして、田畑の高を持、俗人とはいへど、出家の役を勤る身なれば、豫じめ學問もし、經教をも讀、形狀物體筆算までも備はらざれば、人も歸伏せず、勤り難し、則同國三河野村左衛門四郎種藏村平右衛門、打保村孫總、又尾上村稱名寺、平瀬村常德寺、中野村光輪寺、牛尾村蓮勝寺等也、右の四ヶ寺は、中頃より東本願寺末派として寺號を呼といへ共、住持は皆俗人にして別名あり、初の三人は寺號なければ、何右衛門寺、又何大夫寺と稱して、同じく亡者の弔ひ、祖方の齋非時を勤む、居宅の様子、門の構、寺院に替る事なし、葬禮齋非時に麻上下を著して導師と成勤、平僧に准じて野良頭にて亡者を取置するは、片鄙ながらいと珍らし、是深山幽谷にして、六七里が間に寺院なく、道儀高德の出家なければ、往古より如此致來りしと覺ゆ、若兄弟あれば、總領は名主問屋を勤役して、弟は同居しながら寺役をなせり、遠州、三河、美濃、河内、内、杯にも、毛坊主有よし、聞り、又同國大野村蜂谷庄出羽平村に洞窟あり、土人傳へいふ、昔し仁徳帝の御宇、二面四手四足なりし宿讎シツナといふ異形の者住し跡なりといふ、されば此國の谷間に笹多く生ず、其中に葉の有べき所に、魚の形に類せるもの生ず、小き笋の如し、末細く尾の形になり、鱸の様たる所も有、頭と覺しき所竹に付たるさ、葉卷て鱗の如し、三四月頃次第に太り、忽然と枝を離れ、水中に落れば變じて魚と成、故に土俗笹魚と號す、味ひも美にして毒なし、誠に非情の有情と化する理、更にはかり難し、

〔本朝俗諺志四〕毛坊主ウヰノウヂ

飛州の山中に、毛坊主といふあり、農業木樵りて常の百姓並也、はるか奥山にて出家などはな